

On the Charms of `Tales of Little Grey Rabbit'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1994-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4300

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「グレイ・ラビット物語」の魅力を追って

——田舎の暮らしの中から——

中 野 節 子

20世紀を代表する優れた動物ファンタジーの作者 A・アトリー (Alison Uttley: 1884-1976) は、動物を主人公にした最初の作品『りすと野うさぎと小さな灰色うさぎ』(*The Squirrel, The Hare and The Little Grey Rabbit*) を 1929 年にハイネマン社より出版し、作家としてのスタートを切る。「グレイ・ラビットの物語」として知られているこの一連の物語は、1975 年の『野うさぎへアーと虹』(*Hare and the Rainbow*) に至るまでの 46 年間に、合計 36 冊 (うち 2 冊は劇) 出版されている。いずれもイギリスの片田

THE SQUIRREL THE HARE AND THE LITTLE GREY RABBIT.

BY ALISON UTTLEY
PICTURES BY
MARGARET TEMPEST



LONDON: WILLIAM HEINEMANN LTD.

——『りすと野うさぎと小さな灰色うさぎ』
(ハイネマン社、1929 年) のタイトルページ。
(挿絵、M. テンペスト)。——

舎に生活する小さな動物たちを主人公にした、田園讃歌とも言うべきファンタジーの作品であった。最初の4つの物語は、ハインマン社から出版されているが、『りすのスキレル、スケートに行く』(*Squirrel Goes Skating*, 1934)からの物語は、全てコリンズ社からのものである。1970年出版の『リトル・グレイ・ラビット、北極に行く』からの最後の5冊が、K・ウィグルズワース(Katherine Wigglesworth)の挿絵であるのを除いて、その他の作品には、全て最初の物語の挿絵画家M・テンペスト(Margaret Tempest: 1892-1982)の手になる見事な挿絵が添えられている¹⁾。

『幼い子の文学』(中央公論社: 1980)の中で瀬田貞二氏は、1902年に『ピーター・ラビットのお話』(*The Tale of Peter Rabbit*)を発表した、同時代の優れた動物ファンタジーの作者B・ポター(Beatrix Potter: 1866-1943)と、このアトリーとの作風の違いを分析して、「博物誌的な見方からおのずと野の動物やそれを取りまく自然を物語の中に取り入れることができたビアトリクス・ポターに対して、アトリーのほうは、田舎に生まれ育った人特有の雰囲気で、自然界の規則を物語の中に取り込んでみようという試みをしている」、その一つの手段として「伝承的なものの見方や知識をたくさん知っていて、それを物語の中でふんだんに使っている」ことを指摘している。そしてまた瀬田氏は、これらの動物ファンタジーを始めとして、タイム・ファンタジー『時の旅人』(*A Traveller in Time*, 1939)や、数々の自然のエッセイ集等を残したアトリー文学の魅力の一つが、この「土俗的なもの、民衆の暮らしの中で伝えられてきた健全なものが、物語の中につつまり盛り込んである」ところにあると示唆しているのである。常に田舎に憧れ、田園の風物の中に安らぎを求めてやまないイギリスの人々の心を引きつける魅力を、アトリーの文学が期せずしてふんだんに持っていたことが分かる。

一見、青々とした緑に溢れた自然の国と考えられるイギリスは、羊の放し飼いに代表される牧畜と世界に先駆けた産業革命等によって、国土を丸裸にされた「開発され(尽くされ)た国」('cultivated country')である。その代償として、強烈な田園指向やナショナル・トラスト運動のような自然保護の動きが、人々の間に早くから生まれていったとも考えられる。イギリスの緑は、実のところ、徹底的な自然破壊の結果の人工の緑なのである。隅々まで人の手の入った管理された自然の国イギリス。この極めつけの大人の国の、現実的な国土を背景にして、数々のファンタジー児童文学の傑作が存在する。

そしてアトリーの動物ファンタジーの作品もまた、現実と理想の激しいせめぎあいから生まれた、一つの美しいフィクションであったと言える。

Ⅰ 田舎の風習と年中行事

「グレイ・ラビットの物語」の新しいシリーズが、コリンズ社から出版されるようになったとき、本の形も装丁も、そしてもちろん M・テンペストの愛らしい挿絵も、ハインeman社から出ていた前の4冊と何一つ変らないものだった。ただ一つ、新シリーズの各巻の冒頭に作者アトリーの手になる同じ序文が、繰り返し使われていたということが目新しい変化と言えようか。そこには、電気もガスもなく、手づくりのろうそくの明かりの下で、泉から酌んできた水と木を燃やしておこした火を使っの料理やハーブ・ティーを楽しみ、生け垣を通り抜けるとき、羊たちがまるで通行税のように残していった羊毛を集めて編んだマットと、人間の女の人がハンドバックから落としていった手鏡を使っの暮らしを営む三人(?)の共同生活者たちの姿が描かれている。そして彼らのこのような生活の様子をアトリーは、「グレイ・ラビットのこの田舎の暮らしは、作者であるわたしの知っている田舎の暮らし方だったのです」('The country ways of Gray Rabbit were the country ways known to the author.')

と述べている。そしてまた、自然の季節のうつろいと共に展開される小動物たちの生活はそのままに、作者の生まれ故郷ダービシャーの村の人々の年中行事を描く、一つの歳時記ともなっているのである。

春の訪れを予告する最初の行事、2月14日のヴァレンタイン・デー(St. Valentine's Day)の頃になると一躍忙しくなるのは、郵便配達人のロビンである。昔からの小鳥たちのヴァレンタインのメッセージに加えて、近頃では小動物間でも、愛のカードのやりとりをするようになったからである。にわか配達人として駆り出された牛乳屋のヘッジ hog氏も、このような流行に頭を傾げながらも、一日郵便屋の役目を果たすのに忙しい。貸してもらった郵便屋の帽子を家族に褒められ、満更でもないその様子が微笑ましい。差出人を書かないで出されるこのヴァレンタインのメッセージ、一体誰から来たものかとそれぞれが頭をひねるところが、ちょっとした興奮を巻き起こす楽しい年中行事の一つである。

シュロヴ・チューズデイ(Shrove Tuesday)の五旬節の火曜日は、別名パンケーキ・デーとも言われる。イースター(Easter)ー復活祭ー前の6週間

目の火曜日のことである。翌日の水曜日は、アッシュ・ウェンズデー (Ash Wednesday) - 「聖灰水曜日」 - であり、この日から四旬節-レント (Lent) - が始まることになっている。レントの期間中、すなわちアッシュ・ウェンズデーからイースターまでの日曜日を除いた 40 日間は、肉食を慎む慣習があった。アトリーの故郷、ダービシャーのクロムフォード (Cromford) 村では、教会の鐘が正午に鳴り響き、人々はそのときから夕べの鐘が鳴るまでの間に、残っている卵や牛乳等を全て使ってパンケーキを焼き、心ゆくまで食べたり、貧しい人に恵んだりして過ごし、翌日から始まるレントの肉食抜きの期間に備えたのである。パンケーキ作りの作業は、教会の中庭や村の広場にそれぞれが道具と材料を持ち寄って集まり、村中総出で行われることが多く、子どもたちも大人たちも楽しみにしている賑やかな催しであった。空中高く放り上げられた、芳しい香りの、黄金色のおいしいようなパンケーキを、めでたく自分のお皿に受け取ろうと空を見上げて待機している、紅潮した顔、顔、顔。そこにグレイ・ラビットやスキレルやヘアー等のお馴染みの小動物の顔が加わったとて何の違和感もないような、人間と自然の動物との共生関係が存在する田舎の暮らしであった。

クリスマスと並ぶ、キリスト教の大祭日イースター。キリスト・イエスの死からの復活を祝うこの祭りも、もともとは春の訪れを祝う、古くからの民衆の自然宗教と密接に結びついて生まれたものである。草は萌え出て、花は咲き揃い、卵からは次々とひよこが生まれる再生の春。そのはじけんばかりの生命のよろこびを象徴するイースター・エッグを作り、それを食べたり飾ったりして新しい生命の蘇りを祝うのである。たまごの表面に色をつけたり、さまざまな模様を描いたり、たまご探しゲームに加わったりして、人々が子どもたちと共に祝う、春のお祭りの模様が生き生きと伝わってくる。

5月1日は、古くから夏の始まりの日とされていた。村の子どもたちが総出で祝うメイ・デー、五月祭がやってきたのである。朝早く集めた草の露で顔を洗うと、いつまでも若く美しくいられるという言い伝えもあり、グレイ・ラビットは露集めに余念がない。村の広場にはメイ・ポールが立てられ、色とりどりのリボンが垂れた下で子どもたちが踊る。キャロルを歌い、手に手に王冠や勺を持った子どもたちの行進が、緑一色になった丘を登ってゆくのが見える。メイを祝ってのお祭りの行進である。ところで「メイって誰なの?」と尋ねるスキレル。賢者ふくろう曰く「メイは花たちの女王じゃ。で

あるからして王冠と勺を作って差し上げねばならん。姿はお見せにならぬが、サンザシの木に掛けておけば、見つけて下さるじゃろうよ」ということだった。小さな動物たちはそれぞれに趣向を凝らして、メイに捧げる花輪や王冠作りに励んだ。ヘアーは行列の先頭を飾る「王者の冠」(‘Crown Imperial’)と呼ばれる植物を確保するため、村中を駆け巡っている。丈の高い茎の頂上に、房状の葉と鮮やかなオレンジ色の釣鐘の形をした花をつける植物を、子どもたちと張り合って手に入れるこの作業は、かなりの危険も伴う大仕事なのである。こうして準備された、小動物たちの晴れやかな五月祭の行進の様子は、次のようであった。



——『グレイ・ラビットの五月祭』
(コリンズ社, 1963 年) p. 59.
(挿絵, M. テンベスト)。——

Grey Rabbit and Squirrel slung the crown on a hazel stick and carried it between them. Hare walked in front with a tall Crown Imperial sceptre. Fuzzypeg followed after with two cowslip balls. Then came Mr. Hedgehog and Mrs. Hedgehog with a smaller crown of May-blossom, and after them Water Rat carrying a waterlily sceptre. Moldy Warp followed with a sceptre of crab-apple blossom, and the little Hedgehogs, Bill and Tom, walked with a garland of May and bluebells.

(—— *Grey Rabbit's May Day* (1963), p. 58.)

グレイ・ラビットとスキレルの持つ王冠状の花輪の中央には、古くからの慣習に従って、「メイ・レディ」(‘May Lady’)と呼ばれる、花とリボンに飾られた小さな人形が入っている。ヴィクトリア朝時代の村の子どもたちは、この人形に覆いを掛けて持ち歩き、行列を見物に来ているお金持ちに、「メイ・レディを見たいなら、1ペニーおくれ」と呼びかけ、小遣い稼ぎをしたと言う。お祭りは何よりも、子どもたちにとっての無礼請が許される、心弾むひとときだったのである。

冷たい風が身に染み始め、やがて到来する厳しい冬の予感が深まる秋。火薬を使った陰謀事件の首謀者ガイ・フォークス (Guy Fawkes: 1570-1606) の逮捕の記念日、11月5日のガイ・フォークス・デイが訪れる。なにやら物騒なこの日も、子どもたちにとっては、花火に興じる楽しい日であった。そして続く12月は、待ちに待ったクリスマスの季節である。

森のはずれの小さなグレイ・ラビットの家も、クリスマスを迎える準備で大わらわ。家中には温かく火が焚かれ、丸太の燃える匂い、天井からぶら下げられた干したラヴェンダーの芳しい香りが、一面に台所に満ちている。そして入口の敷居から下げられるのは、緑のヒイラギとセイヨウキズタ (ivy) で作られた丸い球に沢山の華やかな彩りの木の実を刺し、リボンで飾った緑のボウル、昔から田舎の人々が、クリスマス・ツリーの代りにこの季節に代々飾り続けた、キッシング・バンチ (Kissing Bunch) である。クリスマスの朝、この飾りの下を通るどんな人にも自由にキスしてよいということになっていて、村の若者たちはそれぞれに、自分のお目当ての娘が通りかかるのを今かいまかと待ちわびていた。温かい家の中と違って、外は一面の雪の世界。銀色の月が美しくも不思議な光を放って、白い雪をきらきらと輝かせている。それに呼応するように、凍える空気の中に無数の星がきらめく。ときどき流れ星が金色の軌跡を残して大空をかすめてゆく。そんな中から、こちらに近づいて来る歌声。クリスマスの晩に家々をまわって、聖歌——キャロル (carol) ——を歌って歩く「ウェイツ」(‘the Waits’) の一団である。

“Holly red and mistletoe white,
The stars are shining with the golden light,
Burning like candles this Holy Night.
Holly red and mistletoe white.

Mistletoe white and holly red,
The doors are shut and the children a-bed.
Fairies at foot and angels at head.
Mistletoe white and holly red.”

(— *Little Grey Rabbit's Christmas* (1939), p. 61.)



—— 『リトル・グレイ・ラビットのクリスマス』
(コリンズ社, 1939 年) p. 51.
(挿絵, M. テンペスト)。——

やがて森に住む小さな動物たちの見た、この世のものとも思われないほど神秘的で美しい、一本のクリスマス・ツリー。それは枝に美味しそうな木の実を下げ、根元には蜜の入った小さな壺を並べ、てっぺんにきらきらと輝くクリスマスの星 (Christmas Star) を飾られて森の奥深く立つ、一本の木であった。目を丸くして見つめる彼らに、もぐらのモルディが「これは自分の作ったクリスマス・ツリー。真冬の乏しい餌に苦しむ、小さな生き物たちへの贈り物を満載した木」なのだと語る。みるみるうちに数を増して集まって来た動物たちは、それぞれの好物を腹一杯詰め込み、残りはお土産にもらって、満ち足りた幸せな気持ちで家路についた。これこそ本来のクリスマスを象徴する木。貧しく恵まれない生活をしている仲間たちを励まし、明日への

生きる糧と希望を与え、救世主の訪れを告げる、クリスマスの精神が一杯に込められたツリーだった。グレイ・ラビットは感極まって、「それ、妖精の木じゃなくて、モウル？」（“Is it a Fairy Tree, Mole?”）と叫ぶ。

それこそが、幼き日の作家アトリー、少女アリスが夢見た本物のクリスマス・ツリー。永遠の心の故郷ダービシャーの、邪悪な霊の住む「暗い森」（‘Dark Wood’）の中に、生涯にわたって明々と輝き続けていた、一本の不滅の「妖精の木」であったに違いない。それは、物語作家としての彼女の創作の原点ともなった、希望と祝福に満ちた真のクリスマス・ツリーであったと思われる。

そう考えてみると、このシリーズの中に登場するもぐらのモルディ、考古学者を連想させるような不可思議なこの動物は、リー・スクールで少女アリスに初めて地球の神秘を垣間見させてくれた自然科学者、地質学者のアレン先生かもしれないとも思えたりしてくる。この先生の手ほどきなくして、後の物語作家アトリーの存在はなかったのだから。

II 主人公になった伝承の動物たち

古き神話・伝説の世界で活躍する動物の代表として再三にわたって子どもの本に登場してくるのが、賢者ふくろうである。同じ動物ファンタジーの書き手 B・ポターの『りすのナトキンの物語』（*The Tale of Squirrel Nutkin*, 1903）のブラウンじいさんも、湖の真ん中にある島の主。いたずら子で反逆児のりすのナトキンと、なぞなぞ問答をしたりして遊んでいたまではよかったが、とうとう終いには、調子に乗って羽目はずしたナトキンの尻尾を嘴でちょんぎって、その余りの傍若無人の振る舞いを戒める、森の秩序の見張り番的存在でもある。また、ぬいぐるみの動物たちと幼い男の子との交流を描いて、不滅の幼年文学の傑作となった「くまのプーさん物語」（*Winnie-the-Pooh*, 1926 & *The House at Pooh Corner*, 1928）に登場するふくろう博士も、やたらにつづり字を間違えたりする頼りなさもあるが、クリストファー・ロビンと共に、森の住人の中で読み書きができる、数少ない動物賢者と見なされているのである。

ふくろうの神話への登場は、ダービシャーの地の先住民族でもあった、古きケルトの民の物語集にも見られる。花を集めて作られた絶世の美女が夫を裏切り、その罪が発覚して捕らわれ、ふくろうの姿に変えられて森に放た

れる。以後ふくろうは、他の鳥から仲間外れにされ、唯一彼らが寝静まった夜の間だけ出歩くことが許されるようになったのだという物語である。またギリシャ神話においては、学問と芸術の守護女神ミネルヴァに仕える鳥として登場し、人々の尊敬を集めるようになった。この「グレイ・ラビットの物語」では、専らこのギリシャ神話の知恵を司る鳥、「賢者ふくろう」(‘Wise Owl’)として活躍している。常に他の小動物からは敬遠される存在という点では、ケルトのふくろうのイメージを引き継いでいるが、それはあくまでも、小動物を捕まえて食べてゆかねばならないという彼らの習性のせいである。優しく健気なグレイ・ラビットは彼のお気に入りであり、なにくれとなく助けてくれたりもする。しかし、ものを頼むときにはそれなりの見返りを要求する自然界の法則を頑として曲げることなく、その結果として、グレイ・ラビットは彼女の大切な尻尾を、あのりすのナトキン同様、ちょんぎられたりもするのである。こう考えてみると、ポターとアトリー、両動物ファンタジー作が描いたふくろうは、共通して森の秩序を維持する、自然界の賢者であったことが分かる。

シリーズ最初の物語に揃って登場したりすのスキレルと野うさぎのヘアー、そして灰色うさぎのリトル・グレイ・ラビット。全く種類を異にしたこのような動物たちの共同生活を中心にして様々な物語が展開されてゆく。自然界には決して存在しない動物たちの組合せを堂々と使っているのが、冷徹な自然観察者であったポターが成し得なかった、アトリーのファンタジーの世界の特徴である。いつも甲斐甲斐しく仲間の面倒をみる、世話好きで「ちっとも気取りのない」グレイ・ラビットの上には、優しい母親のイメージも重なってくる。森の外れにある小さな家での彼らの共同生活は、ひとえにこの健気で小さな灰色うさぎの献身の上に成り立っていると言っても過言ではない。彼女の働きと愛情に守られて、他の二人(?)の気楽な振る舞いが可能となっているのは明らかである。保護者役のグレイ・ラビットとその庇護の許で、悠々と子ども時代を謳歌しているヘアーとスキレルであることも分かってくる。しかし一見不公平の感もあるこの三者の間に、奇妙なバランス感覚が働いているのも事実なのである。怠け者の困った共同生活者たちに頼られることによって、グレイ・ラビットの活躍に一層の弾みがついているのも確かであるのだが。そこには私たちの生活でも目にすることの多い、不思議な持ちつ持たれつの関係が繰り返り広げられていて、思わず苦笑を禁じ得ない。シリー

ズ全体の主人公となっているグレイ・ラビットの名前が、本の題名に再三登場してくるのは当然のこととして（34冊の物語中19冊に登場）、続いて多いのが野うさぎヘアーの7回である。スキレルの登場は3回であるのを考えると、このいつも失敗を繰り返す「うぬぼれ屋」のヘアーの活躍が印象に残る。好奇心が旺盛で、何事にも積極的に鼻を突っ込んでみるのはよいが、すぐに弱音を吐き、からきし意気地のないこの愛すべき問題児ヘアーに寄せる、子どもたち、特に男の子たちの共感の程がしのばれる。「グレイ・ラビット物語」シリーズの最後の物語の主人公もこのヘアーであり、アトリー自身もその人気をあらためて認めているような、興味深い締め括りとなっている。

大雨の後、目前の大空に架かる虹の橋。それは大きな弧の内部にもう一つ小さな弧がある、二重構造を持った特別な虹の架け橋であった。もぐらのモルディ・ワープを始めとする小動物たちは、思わず古くから伝承されている虹の唱を口ずさむ。

“Rainbow, rainbow,
How many colours do you spy,
Seven colours, from violet to red
To cover the rainbow in the sky.

Violet, indigo, blue, green,
The prettiest colours ever seen,
Yellow, orange, and rosy red
To cover the rainbow's misty head,”

(— *Hare and the Rainbow* (1975), p. 18.)

モルディによると、天空には雨と光でできた女神アイリス（Iris）が住んでいて、大雨の後に空に架かる虹の橋を降りて、地上にやって来るのだと言う。彼女こそ虹の架け橋のふもとに隠されている宝の管理人である。宝探しというとすぐに興奮するヘアーと共に、小動物たちも思い思いの道具を抱えて、虹の立つふもとのサンザシの木の下に集まって来た。側の茂みには、彼らの到着を待って餌にしてやろうと待機する、悪役のきつねレイナード（Reynard）の姿も見え隠れしている。やがて虹の架け橋を渡って、七色の

虹の輝きに包まれた女神アイリスが地上に降り立った。彼女は金色の髪と金色に輝く肌、くるぶしのところに小さな翼を持つ美しい女性で、雨の女神であり、虹の精でもある。天の神々から、地上に住む人間や動物たちへ遣わされた天の使者なのである。驚いて見つめている動物たちに、アイリスは薄織の紗（gauze）の切れはしを投げ与える。虹の七色をしたこの布は、雨や嵐の猛威から守ってくれるお守りとして、彼らの頭や首に巻きつけられた。彼女の許可を受け、虹のふもとを掘り進める動物たち。やがてローマのコインが一杯つまった広口の壺が出てきた。モルディがコインを草の上にばらまくと、お金と一緒にヘアーそっくりの青銅製のうさぎの彫像が現れる。驚き怪しんでいるヘアーに、「さあ、これはあなたによ、ヘアー。あなたは今は臆病だけど、これからは勇敢になれるよう努力してみてね。あなたの御先祖は、わたしたちがよく知っている方々。わたしたちはあなたをレプス（Lepus）と呼んでるの。あなたはわたしたちの友人、レプスなのよ」と語りかけるアイリスであった。ぴっくりしてヘアーを見つめる仲間のグレイ・ラビットとスキレル。やっぱりあの憎めないやんちゃ坊主、子どもたちの人気者のヘアーは、ローマの昔からの由緒正しき血統を誇る名家の末裔であり、ただのうさぎではなかったのだ。

動物たちはそれぞれに、自分たちの姿が彫りつけられた古いコインを持って、家路を辿る。一方草むらに潜んでいたきつねのレイナードは、日頃のずるがしこい行いが災いして、金貨の分け前にもありつけず、おまけに「今日は「虹の日」（‘Rainbow Day’）だから平和が大切」とアイリスに諭されて、夕食に草を袋に詰め込んで家路につかねばならなかった。それに反して、誠実に一生懸命に生きてきた小さな動物たちは、百年に一度この地上を訪れるというこの女神アイリスから、虹の祝福を一杯に受けることができたのである。それはコインばかりでなく、アイリスに見えたこの良き日、太陽と月、昼間と夜、雨の後に現れる虹の美しさの思い出のかけがえのない宝物だったのである。こうして、一同の見守る中で、アイリスは再び天上の世界に帰って行った。

帰宅後モルディは、この日の宝物を自分の財宝管理室の金庫に、大切に収めた。そして、この物語の最後は、次のように結ばれている。



——『野うさぎヘアーと虹』
 (コリンズ社, 1975年) p. 62.
 (挿絵, K. ウィグルズワース)。——

As for Grey Rabbit, sometimes she wore her bit of gauzy scarf with its rainbow colours, and when she had it round her neck she became young and gay and merry, and she sang the song of the rainbow again.

“Violet, indigo, blue, green,
 The clearest colours that ever were seen
 Yellow, orange and rosy red,
 To cover the rainbow's lovely head.”

(— *Hare and the Rainbow* (1975), p. 63.)

46年間にわたって営々と書き続けられた「グレイ・ラビット物語」。その最終巻『野うさぎヘアーと虹』の最後におかれたこの虹の歌を見ると、すぐに思い浮かぶのは、『聖書』に書き留められた、父なる神とノアの一家との間の契約の印として、大空に架けられた虹のことである。邪悪を極めた人間の世界を一新するために、神が起こした未曾有の大洪水の後、もう二度とこのような災害は起こさないと誓って、神の側から人間の末裔と彼らの治める動物たちに送られたという、和解の契約としての虹の存在である。この最

終巻を出版したとき、アトリーは既に最晩年の 91 歳を迎えていた。しかし、彼女の個人生活は、最愛の一人息子ジョンとの確執等、決して全てが順風満帆であったとは言えない。公的な生活においても、挿絵画家 M・テンベスのいさかいに代表される如く、常にぎくしゃくとした関係が続けていた彼女が、最晩年を迎えたそのとき、一体どういう思いでこの虹の讃歌を綴ったのであろうか。ワーズワース (William Wordsworth: 1770-1850) のあの有名な幼年讃歌とも言うべき「虹」の詩の一節、‘My heart leaps up when I behold a rainbow in the sky.’ が浮かんでくる。文学者にとどまらず、どんな人にとっても、感受性に溢れ、未来への希望と可能性とに満ち、自然の木々や小動物との共感の直中に生きていた子ども時代は、まさに人生の至福のときであると言えよう。その私生活がどうであれ、アトリーが自分のかつて経験した至福のときを、全てこれらの動物ファンタジーの中に封印して生きたのは事実である。そんな彼女の、40 余年の不断努力の結果として築かれた作品の中で、自分たちの子ども時代の思い出と重ね合わせつつ、新しいファンタジーの世界を共有するよろこびが、私たち読者の手に確実に残されることになった。まさにこれこそは、希有な想像力が創造した、物語の永遠の生命との遭遇のよろこびであると言えるのではなからうか。

それはまた、少女アリスが垣間見た、幻の「妖精の木」の周りに紡がれた物語の世界の中の「虹」の七色の輝きもたらす、至福のよろこびなのである。

注

- 1) アトリーの「グレイ・ラビット物語」誕生の経緯等については、『大妻レビュー』第 26 号 (大妻女子大学英文学会刊, 1993) 掲載の私の論文〔「リトル・グレイ・ラビット物語」の誕生——「妖精物語」としての動物ファンタジー——〕参照。なお、「グレイ・ラビット物語」の書誌を、参考資料としてこの論の後に掲げておく。

Bibliography

('Tales of Little Grey Rabbit')

I Single Books

(published by Heinemann, London, with the illustrations of Margaret Tempest)

1. *The Squirrel, The Hare and the Little Grey Rabbit*, 1929.
2. *How Little Grey Rabbit Got Back Her Tail*, 1930.
3. *The Great Adventure of Hare*, 1931.
4. *The Story of Fuzzypeg the Hedgehog*, 1932.

(published by Collins, London, with the illustrations of Margaret Tempest)

5. *Squirrel Goes Skating*, 1934.
6. *Wise Owl's Story*, 1935.
7. *Little Grey Rabbit's Party*, 1936.
8. *The Knot Squirrel Tied*, 1937.
9. *Fuzzypeg Goes to School*, 1938.
10. *Little Grey Rabbit's Christmas*, 1939.
11. *Moldy Warp, The Mole*, 1940.
12. *Hare Joins the Home Guard*, 1942.
13. *Little Grey Rabbit's Washing Day*, 1942.
14. *Water Rat's Picnic*, 1943.
15. *Little Grey Rabbit's Birthday*, 1944.
16. *The Speckled Hen*, 1946.
17. *Little Grey Rabbit and the Weasels*, 1947.
18. *Grey Rabbit and the Wandering Hedgehog*, 1948.
19. *Little Grey Rabbit Makes Lace*, 1950.
20. *Hare and the Easter Eggs*, 1952.
21. *Little Grey Rabbit's Valentine*, 1953.
22. *Little Grey Rabbit Goes to Sea*, 1954.
23. *Hare and Guy Fawkes*, 1956.
24. *Little Grey Rabbit's Paint-Box*, 1958.
25. *Grey Rabbit Finds a Shoe*, 1960.
26. *Grey Rabbit and the Circus*, 1961.
27. *Grey Rabbit's May Day*, 1963.
28. *Hare Goes Shopping*, 1965.
29. *Little Grey Rabbit's Pancake Day*, 1967.

(with the illustrations of Katherine Wigglesworth)

30. *Little Grey Rabbit Goes to the North Pole*, 1970.
31. *Fuzzypeg's Brother*, 1971.
32. *Little Grey Rabbit's Spring Cleaning Party*, 1972.
33. *Little Grey Rabbit and the Snow-Bady*, 1973.
34. *Hare and the Rainbow*, 1975. (also published by Puffin, Harmondsworth, 1979).

II Plays

1. *Little Grey Rabbit to the Rescue*, illustrated by Margaret Tempest, Collins, London, 1945.
2. *Three Little Grey Rabbit Plays* (includes *Grey Rabbit's Hospital*, *The Robber*, *A Christmas Story*), Heinemann, London, 1961.

III Anthologies

1. *Little Grey Rabbit's Storybook*, illustrated by M. Tempest, Collins, 1977.
2. *Tales of Grey Rabbit*, illustrated by Faith Jaques, Heinemann, 1980. (also published by Piccolo Books, London, 1982).
3. *Little Grey Rabbit's Second Storybook*, illustrated by M. Tempest, Collins, 1981.
4. *Little Grey Rabbit's Alphabet Book*, with the pictures of M. Tempest, Collins, 1985.